

# 京都橘大学 歴史遺産調査報告 2017

山科大塚・小山石切丁場、二条城東側堀川石垣

2018年3月  
京都橘大学 文学部



## はじめに

本学の歴史遺産学科は、その前身となる文化財学科が1996（平成8）年に設置申請、同年12月に認可、1997（平成9）年4月より開設された。その後、2012年4月1日より文化財学科から歴史遺産学科へ学科名を変更した。

文化財学科を開設した当時の門脇祐二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な『文化財学』の創出をめざす研究の進展、目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける学びの一環として、本学では2000（平成12）年3月から開始した京都市伏見区にある法隆寺跡の測量調査以降、近畿地方東北部のフィールドを中心として、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場での実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は主に、山科大塚・小山石切丁場などの諸調査を実施した。ここではそれらの成果を中心として報告するものである。報告書を作ることもまた、学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大切な作業であり、これらの活動全体を通して、文化遺産のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

さて、2012（平成24）年に学科名を歴史遺産へと銘打ったのは、近年世界遺産や文化的景観など、多様化する文化財とその周辺学の拡がりを省みた結果である。「人類の所産のうち、考古資料、彫刻、絵画、工芸品、歴史資料などの動産遺産と、建造物、近代化遺産、都市・文化的景観、史跡、埋蔵文化財といった土地に定着した不動産遺産、これらの2つの領域の文化遺産情報を対象として歴史遺産という認識の学びに高める」というものである。

この歴史遺産調査報告書は、そのうちの考古遺産、建築遺産といった文化遺産を主とする。我々がここで文化遺産に関わる作業と勉学に向かえるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。この場を借りて心から感謝申し上げます。今後とも文化遺産調査についての変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願い申し上げる次第である。

## 例　　言

1. 本書は、京都橘大学が2017年度に実施した京都市山科大塚・小山石切丁場や二条城東側堀川石垣などの歴史遺産学科歴史遺産コースを主とした文化遺産の調査報告書である。
2. 調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系によってその位置を示した。
3. 本文の執筆には、第1章を一瀬和夫・山本美喜、第2章を鈴木知怜・嵯峨根絵美、第3章を広瀬侑紀、第4章を広瀬侑紀・鈴木知怜があたった。
4. 本書の編集は、一瀬和夫・畠麻由美・山本美喜・鈴木知怜が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
5. 調査にあたっては、大塚共有山護持会・奥田 尚、奥村弥恵・森岡秀人・馬瀬智光・新田和央・西森正晃、黒須亜希子・平井信夫・岩村義憲・中川亀造・武内真一・久保 孝・青地一郎・福家恭・竹村亮仁をはじめとする関係機関・諸氏諸娘にご高配を賜った。記して感謝したい。

# 目 次

## はじめに・例言

### 目次

第1章	2017年度の文化遺産調査概要と経過	1
第2章	山科大塚・小山石切丁場クレーター状平場の発掘調査	2
第3章	大塚・小山石切丁場霞ヶ谷A地区の調査（その2）	8
第4章	二条城東側堀川石垣の調査（その1）	25

## 図・表目次

図1	山科大塚・小山石切丁場位置図	2
図2	山科大塚・小山石切丁場刻印・矢穴石、地区位置図	3
図3	クレーター状平場地形測量図、トレンチ配置図	4
図4	クレーター状平場トレンチ土層断面図	5
図5	クレーター状平場トレンチ平面図	6
図6	霞ヶ谷A地区の地形図刻印・矢穴石の分布	9
図7	霞ヶ谷A地区矢穴形状からみた採石状況	11
図8	矢穴：山科Ⅲ型断面図（1）	13
図9	矢穴：山科Ⅲ型断面図（2）	14
図10	矢穴：山科Ⅱ型断面図	15
図11	矢穴：山科Ⅰ型断面図	16
図12	矢穴：山科V型断面図	17
図13	霞ヶ谷A地区的分類からみた刻印・矢穴石の分布	17
図14	霞ヶ谷A地区 矢穴石（1）	18
図15	霞ヶ谷A地区 矢穴石（2）	19
図16	霞ヶ谷A地区 矢穴石（3）	20
図17	霞ヶ谷A地区 矢穴石（4）	21
図18	霞ヶ谷A地区 矢穴石（5）	22
図19	二条城東側堀川石垣調査位置	25
図20	二条城東側堀川石垣調査位置詳細	25
図21	二条城東側堀川石垣調査区域設定図	26
図22	二条城東側堀川石垣N区（1）	27
図23	二条城東側堀川石垣N区（2）	28
図24	二条城東側堀川石垣N区（3）	29
図25	二条城東側堀川石垣N区（4）	30
図26	二条城東側堀川石垣N区（5）	31
図27	二条城堀川石垣矢穴断面図	32
表1	霞ヶ谷A地区 矢穴石リスト	12
表2	二条城東側堀川石垣刻印一覧表	33

## 第1章

### 2017年度の文化遺産調査 概要と経過

#### 1. 2017年度の調査状況

今年度の考古遺産の現地調査作業については、夏期を中心に、京都市山科区大塚・小山石切丁場、京都市中京区二条城東側堀川石垣の調査を実施した。

本書の全体の整理作業にあたっては、歴史遺産学実習の授業を中心に行った。

#### 2. 京都市山科区大塚・小山石切丁場、 大塚東群葭ヶ谷A地区の石材実測調査

京都市山科区大塚・小山の山中に所在する石切丁場では、本学の裏山となる行者ヶ森の山の頂上付近から東及び北斜面の大塚と山科・音羽川を離てた小山の山中に刻印と矢穴のある石が分布する。大塚は刻印や矢穴石の分布によって大きくわけて、大塚西群と大塚東群に分けることができる。

その石切丁場のうち今年度は大塚東群の葭ヶ谷A地区の測量及び矢穴の残る石材の分布把握と実測の補足を、特に今年はA地区西側を中心に行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、広瀬侑紀がこれを助けた。日程は、2017年8月21～24・26・27日・12月27日

を行った。調査参加者は浅野豊、安達友美、伊藤真子、上野真依、浦田雅士、岡田一矢、金井隼弥、河端大、金剛佳佑、谷敷朋奈、畠麻由美、中谷俊哉、中西由圭莉、西浦千賀、西村侑里子、曉田大樹、藤井駿佑、松谷友香、山中凌、山本美喜、渡辺真帆である。

#### 3. 二条城堀川石垣の実測調査

京都市には聚楽第・伏見・二条・淀城といった中世末～近世前期石垣城郭がある。近年では、京都市内の頻繁な発掘調査などでその様子が詳細に判明しつつある。伏見区伏見城の石垣石材は廃城の後、二条城や淀城にも再利用が認められるところである。中京区二条城東側の堀川護岸にも矢穴・刻印をもつ石材がある。これらの石垣石材の中には石切のための矢穴を残す石材、刻印の入った石材もあり、山科大塚・小山石切丁場との関連も考えられる。

今回本学は、昨年に続いて二条城堀川石垣の実測を行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、広瀬侑紀がこれを助けた。日程は、2017年9月14・15・17日・12月15日を行った。

調査参加者は、浅野豊、上野真依、浦田雅士、大澤陽平、岡田一矢、景山敦也、金井隼弥、河端大、金剛佳佑、畠麻由美、中西由圭莉、西浦千賀、西村侑里子、曉田大樹、藤井駿佑、三加茂貴太、山中凌、山本美喜、渡辺真帆である。



写真1 山科大塚・小山石切丁場 調査風景



写真2 山科大塚・小山石切丁場 調査風景



写真3 二条城堀川 石垣実測調査



写真4 二条城堀川 石垣実測調査

## 第2章

### 山科大塚・小山石切丁場 クレーター状平場の発掘調査

#### 1. 調査の経緯

京都市聚楽第、伏見、二条、淀城といった中世末～近世前期石垣城郭が京都市内の頻繁な発掘調査などで詳細に判明しつつある。現在一部が明治天皇陵に含まれてゐる伏見城跡は、三の丸南辺から四の丸にかけての石垣材が宮内庁に調査され、現地に展示される<sup>(1)</sup>。西側の御香宮神社にも矢穴石や刻印石が集められる<sup>(2)</sup>。伏見城の石垣石材は二条城や淀城に再利用される実態も認められる。二条城東側の堀川護岸にも矢穴・刻印をもつ石材がある。すなわち、これらの石垣石材の中には石切のための矢穴を残す石材、類する刻印、石種は花崗班岩・石英班岩など、京都市山科区大塚・小山の山中に所在する山科大塚・小山石切丁場との関連する石材が数多く認められつつあるからである。今回はこの山科大塚・小山石切丁場のクレーター状平場の状態を確認することを目的とし、京都市とともに平成28年8月に発掘調査を行った<sup>(3)</sup>。すでに京都市報告書において報告済みのものであるが、ここで再録・再構成を試みるものである。



図1 山科大塚・小山石切丁場位置図

#### 2. 遺跡の位置と環境

京都市山科区は京都市の東部にこの山科石切丁場は所在している。その範囲は行者ヶ森周辺の大塚と、山科音羽川を挟んで北側に位置する小山にひろがる。山科石切丁場には、山科盆地の北東の行者ヶ森の山頂上付近から東及び北斜面の大塚と山科音羽川を北に隔てた小山の山裾に刻印と矢穴のある石が分布する。

この石切丁場から得られた石材の供給先に間連する伏見城は、1594（文禄3）年、豊臣秀吉の伏見城を築城から徳川家光の1623（元和9）年の廢城まで、長期間に及ぶ4回の大きな改築城があった。その全期間を通して稼働していたと考えられる。

この石切丁場がある地域は行者ヶ森北方の東斜面に集中する。行者ヶ森一帯には御坊ノ内町付近から聴聾の瀧にかけて、剪断された頁岩中にチャートや玄武岩質凝灰岩、砂岩のレンズ状をなす岩体が含まれ、その内、花崗斑岩は聴聾の瀧を越えた部分から音羽の瀧の南方まで分布する。そして、この花崗斑岩は行者ヶ森の北方にかけて分布し、尾根の西側では斑晶が顕著な石英斑岩となる。すなわち、行者ヶ森から小山の御坊ノ内町にある白石神社付近北方にかけて、石英斑岩を岩脈となす。こうしたことから、刻印石材の種類は、主に玄武岩質凝灰岩と石英斑岩及び、花崗斑岩となる<sup>(4)</sup>。

このうち刻印石や矢穴石のまとまり方で大塚（大塚西群、大塚東群）、小山の2つに大きくわけられ、刻印石は現在約15石が確認される。

#### 3. 層序と遺構

クレーター状平場は、刻印石や矢穴石が集中する大塚東群のうち藪ヶ谷A地区の中心から急斜面を北に下った場所にある。クレーター状のくぼみの周りを囲むように



写真5 山科大塚・小山石切丁場遠景（北西より）

ドーナツ状の土の盛り上がりもみられる。このクレーター状の平場では、自然石が数石あるだけで、矢穴石は1石しか見つかっておらず、矢穴石周辺は丘陵を切り崩して平場が作られている。その中央にあるくぼみに、形状の異なった矢穴が掘られている石がある。矢で少なくとも

も3回は石を切った痕が残る。長辺が190cm、短辺が105cmの石英斑岩である。一昨年の報告では近世城郭の石垣石材として粗削りされたものが仮置き後に放置されたものと推測した<sup>3)</sup>。

今回の調査では、この石の東側に南北方向に長いトレ



図2 山科大塚・小山石切丁場刻印・矢穴石・地区位置図

図3 クレーター状平場地形測量図、トレント配置図

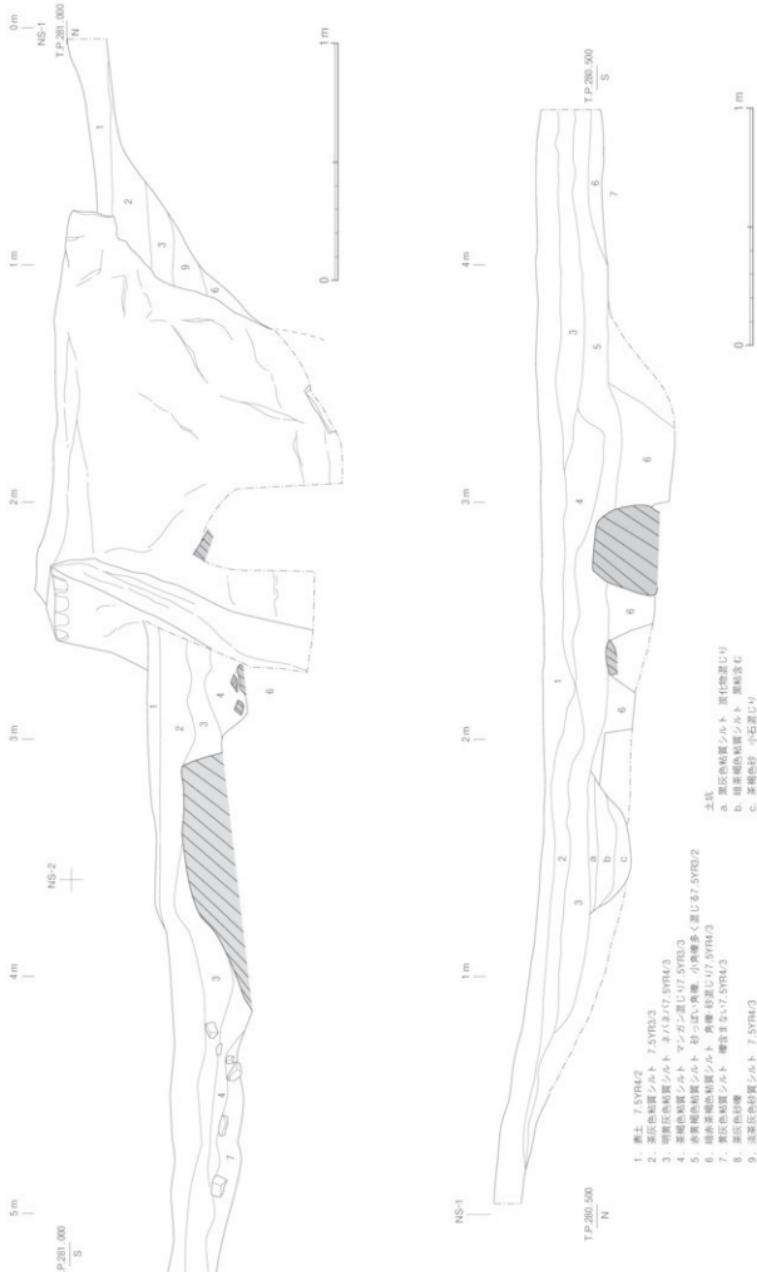


図4 クレーター状平場トレンチ土層断面図

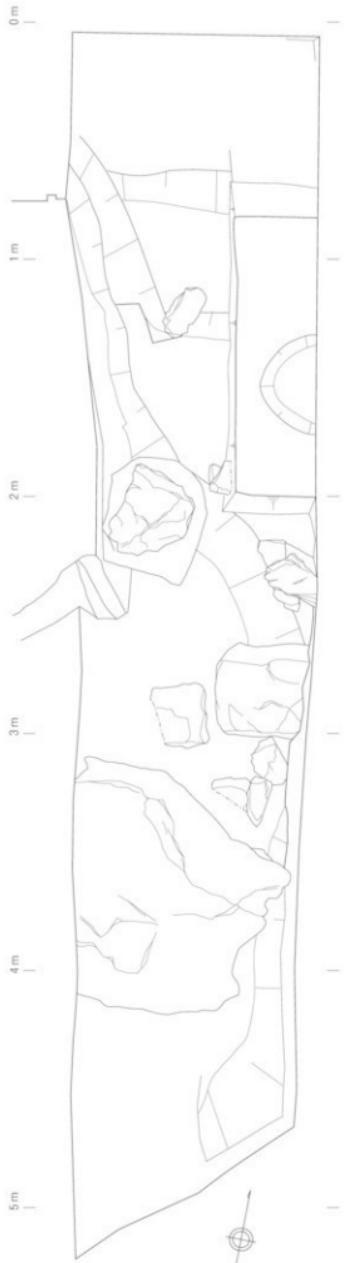
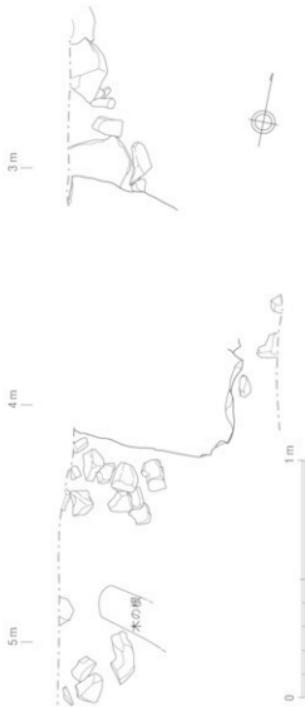


図5 クレーター状平場トレンチ平面図

ンチを人力で掘削し、石の状態を確認した。トレンチは南北に5m、東西に1mの大きさで、深さは117cmの大きさである。深さは、まだ50cmは下がると見込まれることから、石の全体の大きさは少なくとも160cmはあると考えることができる。また、この矢穴石より南へ70cm程の場所に幅1mほどの石があることが確認できた。さらに、石の東側へ90cmの地点では、土坑も確認することができた。

東壁は、第1～7層まである。第1～3層は1m地点までは緩やかに傾斜しているが、その後は南にかけて水平に堆積する。1m50cm地点の土坑は黒灰色粘質シルトの炭化物まじりのa層と暗茶褐色粘質シルトの黒粒を含むb層が堆積する。第4層は茶褐色粘質シルトのマンガン混じりで最大で16cmに広がる。第5層は赤黄褐色粘質シルトで砂質に、角礫、小角礫が多く混じる。最大で17cmの厚みの広がりをみせる。第6層は、暗赤茶褐色粘質のシルトに角礫の砂が混じっている。

西壁では第7層は黄灰色粘質なシルトで礫は含まれて



いない。第8層は地山で茶灰色砂礫である。第9層は淡茶灰色砂質のシルトであり、何も含まれない。

南にある幅1mの石を中心に西壁2m70cmの矢穴石の終わりの地点から5cm台のコッパが南にかけてみられはじめる。また、4m付近から、大きさが10cm台のコッパが散らばっている様子がみられはじめる。

のことからもわかるように、矢穴石より周辺50cm周辺では5cm、10cm、15cm台のコッパが大量に出土する（写真9）。

#### 4. 矢穴石所在のクレーター状平場の周囲

クレーター状平場矢穴石がある地点を中心としてすり鉢状土坑を掘っている。この矢穴石は異った場所で石を逐次割り、ここへ運んできたのではなく、おそらく最終的には2m以上あった巨石を、この平場で削っていた可能性が高まった。そのことを示すように、矢穴石周辺ではコッパが大量に出土する。すり鉢状土坑は、3m近く採石のために深く掘った可能性がある。また、このすり鉢状の土坑を掘削した際に発生した掘削残土は土坑周囲にかきあげたために、ドーナツ状の土堤のようなものが形成されたと考えられ、その掘削土量と対比できよう。



写真6 クレーター状平場トレント下面（南より）



写真8 クレーター状平場トレント上面（北より）

つまり、クレーター状平場のくぼみを埋むように盛り土がっている土は、この時の堆土によって形成された地形であるということが確認できたと考える。

#### 註

- (1) 有馬 伸 2009「桃山陵墓地下水管工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第60号 宮内庁書陵部
- (2) 京都橘大学文学部 2017『京都橘大学歴史遺産調査報告2016』
- (3) 嵐城根絵美 2017「大塚・小山石切丁場（16A003）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化市民局
- (4) 奥田 尚 2016「行者ヶ森付近の石切場跡の石材と石種」『古代学研究』209号
- (5) 京都橘大学文学部 2016『京都橘大学歴史遺産調査報告2015』

#### 参考文献

- 武内良一 2015「『山科の石』について—伏見城関連 山科（大塚・小山）の石切場—（下）」『古代学研究』207号  
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2001「是ヨリ北紀州」考古アラカルト26『リーフレット京都』No.153

山科石切場調査・研究グループ 2015「伏見城関連の石切場について—『豊徳』期における石垣石材調達をめぐる所見の2、3—」



写真7 クレーター状平場トレント北半断面（東より）



写真9 クレーター状平場トレント南半断面（北東より）

### 第3章

## 大塚・小山石切丁場葭ヶ谷A地区の調査（その2）

### 1. 調査地の位置と調査の経過

山科大塚・小山石切丁場は、京都府山科区に所在する石切丁場である。これらの石切丁場は、2015年から地元調査グループや京都橋大学で調査を進めてきた（山科石丁場2015、京都橋大学2016・2017）。昨年は、大塚・小山石切丁場の葭ヶ谷A地区において、測量調査及び石材分布調査を行った。その結果、葭ヶ谷A地区の東斜面の採石状況が明らかになった。加えて、未調査であった西斜面でも矢穴石が散見する状況が確認できた。

そこで、今回の調査は、昨年に調査を実施した四ッ辻から小ピークを開む東斜面の範囲からは、尾根を跨いだ西側斜面で実施した。そのうち東西40m、南北60m（ $(X = -113540, Y = -14770) \sim (X = -113590, Y = -14700)$ ）の範囲を調査地に設定した。

調査は、設定した範囲内において、標高372.00～342.50mの地形測量を行い、範囲内の石材を悉皆的に確認した。矢穴のある石材については石材の規模と形状を実測し台帳を作成した。また、矢穴石は矢穴の寸法を計測し、矢穴の台帳および矢穴の横断面形状の実測も合わせ行った。

### 2. 調査成果

#### （1）石材分布調査

今回の調査では、昨年の調査地から西側の範囲において地形測量を行い、石材の分布状況を確認した（図6）。調査地の周辺は、葭ヶ谷A地区内の刻印石や矢穴石が多く分布する東斜面と今回の調査地である西斜面をわける尾根が南東から西北方向にのびる。その尾根の頂部には山道が通り、小ピークとなる山頂手前のT.P.361～362m付近で二股となる。その山道の一方は昨年の調査地である東斜面の中央平場につながり、もう一方は行者ヶ森山頂へと向かうハイキングコースとなっている。また、小ピーク付近は自然石が路頭するだけであったが、尾根より西側の斜面には、およそ40石以上の石材が分布し、その内の8石が矢穴石である。

西側の地形測量の追加の結果、昨年はわからなかったこの地区的ピーク（T.P.372.09m）から北西方向にの

びる尾根や西側の谷地形の状況が明らかとなった。尾根を境とした西斜面は、東斜面に較べ急峻な傾斜となっており、矢穴石がまとまって分布する地点（No.36～39）付近はやや崖地となっており、石材の採掘坑の可能性が考えられる。そこから10m程下がったところにあるNo.42の巨石に向かって、谷状の地形となっている。また、そこから少し離れた位置にもNo.43の矢穴石が見られるが、基本的にはこの谷状の地形に向かって石材を落としていたと考えられる。

一方、尾根の頂上付近は東西両斜面ともに自然石を残したままになっている。石材の採掘はそれよりも高所の尾根筋では行わなかったと推定される。何らかの境界を意識して残した可能性もある。また、東斜面に較べ、石材の分布が少ない状況である。西斜面は急勾配な地形に加え、谷状の地形を利用すれば、西方に向かう石材の搬出は東斜面より比較的容易である。そのため、手ごろな石材がより多く採掘された可能性もある。さらに、谷状の地形は南で「おせき渓」をつくる谷地形に合流し、下った先は大岩A地区に至る（図2）。

次に石材の特徴を見てみると、葭ヶ谷A地区の矢穴石の大半は古相を思わせる二分割する石割りによって残されたものである。西斜面の石材も同様の技法のもので構成されるが、No.42の石材は長辺約4.5m、短辺約2.5mの規模で、大型の矢穴で平坦面を作り出した後、規格石材に切り分ける近世城郭の石割技法が用いられている。そして、この石材には2種類の矢穴形状をもつ矢穴列が掘られており、この付近で2回以上の採石があったことを窺わせる。

#### （2）矢穴の調査

山科大塚・小山石丁場に見られる矢穴の調査は、昨年の調査から石材分布調査に合わせて実施してきた。その方法は、個別石材の矢穴列毎に矢穴の寸法を記録し、矢穴の横断面形状の実測図を作成するものである。

昨年の調査では、矢穴の規格を矢穴の横断面形状の大きさから4つの形態にわけて分布状況を検討した。その結果、葭ヶ谷A地区の東斜面においては、石材の採掘坑と考えられる崖みや谷状の地形に石材が集中して分布し、矢穴の規格の違いから丘陵斜面の下から上へと採石地点を移動させていったことを明らかにした。

今回の調査も同様の検討方法で矢穴石の分布状況を確認した。検討に用いた類型は以下のとおりである。

### 類型1（縦断面形状）

#### ①矢穴大

上辺（10～15cm程度）と下辺（5～11.5cm程度）、全体に大きいもの。

#### ②矢穴中大

上辺（9～10.5cm程度）と下辺（5～8.5cm程度）、中程度のもの。

#### ③矢穴中小

上辺（7～8.5cm程度）と下辺（3～6cm程度）、中程度のもの。

#### ④矢穴小

上辺（5～6cm程度）、下辺（3～4cm程度）、小型のもの。

東斜面では、縦断面形状の違いで石材の分布を見たと

ころ、矢穴大・矢穴中大、矢穴中小・矢穴小が異なった谷筋にまとまることが判明した。

西斜面では、No.36～39のまとまりとNo.40～42のまとまりには矢穴大と矢穴中大が見られた。特にNo.41とNo.42には2種類の矢穴列が入っており、縦断面形状を時期差と捉えるならば、2時期の採石が考えられる。一方、No.43は矢穴中小であり、他の矢穴石とは様相が異なる矢穴が用いられている。

### 類型2（横断面形状）

#### ①矢底1列タイプ

矢底に1列のノミ痕が残るもの。横断面の上辺は3.0cm、下辺は1.0cm前後で、Vの字に近い形状である。

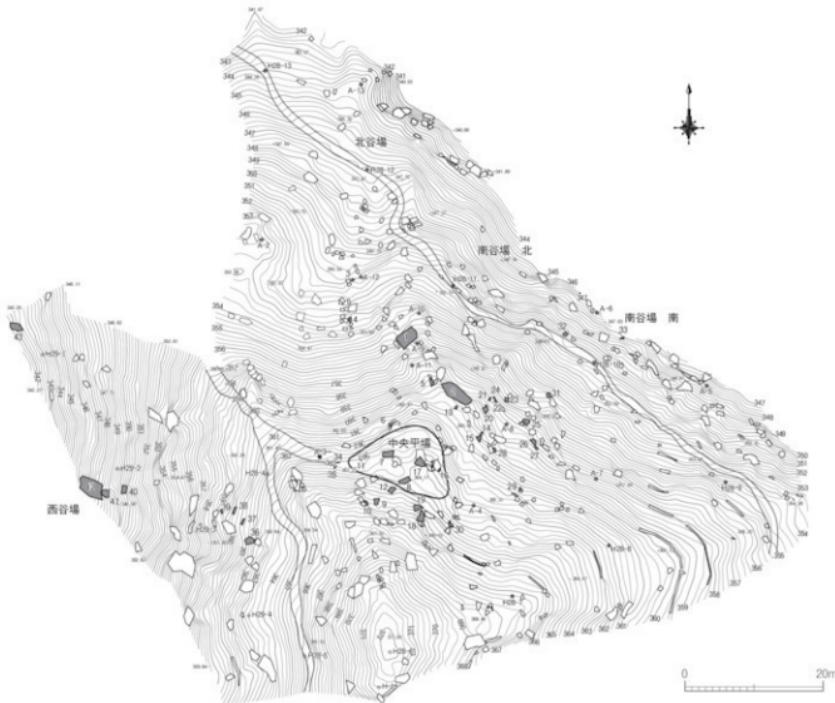


図6 藪ヶ谷A地区の地形図刻印・矢穴石の分布

## ②矢底2列タイプ

矢底に2列のノミ痕が残るもの。横断面の上辺は5.0cm前後、下辺は2.0cm前後で、逆台形状である。

## ③矢底幅広タイプ

矢底の両端にノミ痕があり、中央を未成形もしくは簡単な成形でつくっている。横断面の上辺は5.0~6.0cm、下辺は2.6~4.4cmで、コの字に近い形状である。

横断面形状で石材の分布を見ると、東斜面では、矢底1列タイプのものは、No.8矢穴列B、No.17矢穴列Aが確実なものである。他にも9石がその可能性があり、小型の矢穴（No.7・12）もある。矢底2列タイプは、No.21・23が典型例である。矢底幅広タイプは南西平場に見られた大型の矢穴である。

西斜面では、No.43が矢底1列タイプ、No.38・41矢穴列Cが矢底2列タイプ、No.41・42が矢底幅広タイプの矢穴である。

矢穴の横断面形状は、おそらく矢底1列タイプ、矢底2列タイプ、矢底幅広タイプの順に新しくなると想定され、西斜面の採石は、No.36~39付近とNo.43付近から採石をはじめ、No.40~42付近へと移っていったと考えられる。

## （3）矢穴の分類

矢穴の形状について、縦断面形状（類型1）と横断面形状（類型2）のもつ特徴で類型化して見てみると、両類型には相関関係があることがわかる。これを整理すると以下のようになる。

### 山科Ⅰ型=（類型1）矢穴小+（類型2）矢底1列

（No.8矢穴列B、No.17矢穴列Aなど）（図11）

森岡・藤川分類の古Aタイプ。縦断面形状は矢底がUの字状のもの（I-a型）と隅丸台形のもの（I-b型）がある。I-a型は横断面形状もUの字状であり、中世石造物などに見られる先Aタイプの矢穴からの派生と考えられる。蔵ヶ谷A地区には見られないが、大塚・小山石切丁場内には存在が窺える。山科I-b型の横断面形状はVの字に近い形状を呈する。

### 山科Ⅱ型=（類型1）矢穴中大+（類型2）矢底2列

（No.21・23・クレーター状平場石材矢穴列B・C<sup>(1)</sup>など）（図10）

森岡・藤川分類の古Aタイプ。上辺が10cm×5cm前後の大型の矢穴であるが、縦断面形状は矢底が隅丸になり、縦断面形状も逆台形状となる。

### 山科Ⅲ型=（類型1）矢穴大+（類型2）矢底幅広

（No.7・10・19・32・41・42など）（図8・9）

森岡・藤川分類のAタイプ。さらに大型の矢穴で、上辺は11~15cm×5~7cmである。縦断面形状は角のある逆台形状で、横断面は矢底が3cm前後もあるコの字形状を呈する。

### 山科Ⅳ型=現在のところ該当なし。

森川・藤川編年のBタイプ。今回の調査区では確認されていないが、丁場経営が予期されるので設定しておく。

### 山科Ⅴ型=（類型1）矢穴小+（類型2）矢底1列 (No.7・12)（図12）

森岡・藤川分類のCタイプ。江戸時代中期以降の採石に伴うものである。

山科大塚・小山石切丁場の蔵ヶ谷A地区における矢穴の形状は、おむねこの分類に当てはまると考えられる。この分類をもとに、蔵ヶ谷A地区全体の矢穴石の分布を確認してみると、図13のようになる。

山科Ⅰ型の矢穴は東西両斜面に見られる。数は少ないものの、東斜面の北谷場から中央平場に分布する。続く山科Ⅱ型では東斜面では本調査区での石切がピークに達するのである。南谷場南から中央平場に多く分布し、西斜面も西谷場の上方に見られる。山科Ⅲ型は主に中央平場付近と西谷場下方に限られる。山科Ⅴ型は東斜面の北谷場上方に点在する。割れ石材の2次の石切の可能性もある。

以上のような分布状況から、この付近の採石は北谷場から中央平場と西谷場の北半からはじまり、中央平場南と西谷場へと移行する。さらに東斜面では南西平場付近、西谷場では西谷場下方での採石が盛んとなる。東斜面は下から上へ、西斜面は上から下へと採石・採掘する範囲が移行していく様子が窺える。

## 3.まとめ

今回の調査は、石材の採石地の1つに推定される蔵ヶ谷A地区における石材の分布状況を把握する目的で実施した。これまでの調査によって、矢穴の形状から、複雑な採石状況を整理することができた。

今回調査した、蔵ヶ谷A地区の東斜面にある「一に〇」刻印に対し、西斜面を下った先にある大岩A地区は「角立ち四つ目結」刻印のエリアである。これは、西斜面に刻印石が見られないため、はっきりしたことは言えないが、現状では、蔵ヶ谷A地区的東西で採石した大名が異なることが考えられることから、撤出ルートなどの一部の共有や採石時期差など、刻印石による単純な区分

ではなく、様々な可能性を考慮する必要が生じてきた。この複合性が地表に露出した状況が、蘿ヶ谷B地区には「一に〇」刻印と「平四つ目結」刻印が併刻された石材が3つも存在することが証左となる。

山科大塚・小山石切丁場は、伏見城築城に伴って採石が開始したとされている。伏見城は指月屋敷、指月城、小幡山伏見城、徳川伏見城、主要部の破却した徳川伏見城の5期に分けられる（福家ほか2017）。

一方、蘿ヶ谷A地区に見られる多種の矢穴によって、山科I～V型に分類できる。山科V型は時期が大きく異なり、除外するとしても、3つの型式の矢穴が利用されていることは、伏見城築城と大きく関係しているのではないかと考えられる。

具体的に時期を検討してみると、山科III型は大坂城石切丁場などで確認される森岡・藤川編年のAタイプと同一のものである（森岡ほか2018）。つまり、この形式は元和・寛永期のものと推定される。そこから築城の時期と型式を合わせると矢穴の石切を殆ど用いない段階が指月城（文禄期）、山科I型を小幡山城築城段階（慶長期）、山科II型を徳川伏見城築城段階（慶長期）に当てはめることが可能と考える。

このように、これまでの調査によって、山科大塚・小山石丁場における遺跡の実態を解明していくことが、伏見城の築城にも関係していくことがわかつてき。この成果が、今後の研究に生かされることを期待したい。くわえて出土土器などの遺物も皆無であることも特徴の1つとらえたい。

#### 註

(1) 蘿ヶ谷A地区の北側下方にあるクレーター状平場にある石材は、発掘調査により長辺190cm、短辺105cm（最大幅）、高さ160cm前後の大ささであることが判明した。

石材には3つの面に矢穴列があり、蘿ヶ谷A地区を中心に矢穴の検討を行ってきた結果、この石材の矢穴列Aの矢穴は山科III型、矢穴列Bと矢穴列Cは山科II型に該当する。

のことから、調査当初に想定していた石切工程の復元とは異なり、クレーター状平場にあった大型石材を矢穴列B・Cで分割した後に、石材を掘り出して矢穴列Aによる分割を行ったと推定できる。

しかし、山科III型の矢穴を使った採石は、蘿ヶ谷A地区の中央平場付近に目立つ。このクレーター状平場の石材がなぜ持ち出されずに残っていたのかなど、不明な点が残る。

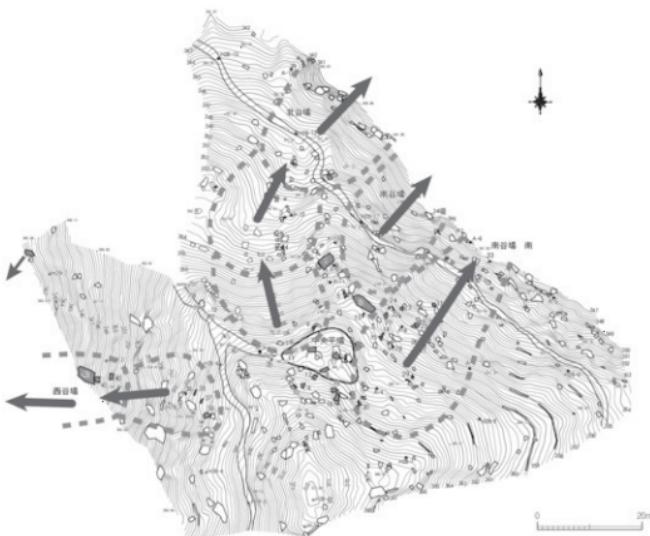


図7 蘿ヶ谷A地区的地形からみた採石状況

表1 菅ヶ谷A地区 矢穴石リスト

石材 No.	列	矢穴						分類名	備考		
		横断面		横断面		類型②	深さ		森岡・藤川 分類	備考	
		上辺	下辺	上辺	下辺						
42	A	23cm	18.5cm	○○	1.5cm以上	2.0cm以上	—	12.1cm		5675-1	
41	B	18.9cm	13.0cm	○○	6.2cm	4.8cm	○○	7.8cm		5675-2	
32	B	15.0cm	11.5cm	○○	7.0cm	3.0cm	○○	12.0cm		5468-1	
10		12.4cm	10.3cm	○○	4.7cm以上	4.4cm	○○	6.3cm		5671-4	
36	A	13.5cm	9.2cm	○○	5.0cm以上	2.0cm以上	○—	11.0cm		5673-4	
32	A	13.0cm	12.0cm	○○	6.0cm	2.5cm以上	○—	10.5cm		5468-1	
42	C	13.7cm	8.4cm	○○	6.0cm	3.8cm	○○	9.0cm		5675-3	
8	A	13cm	7.8cm	○○	6.0cm	3.5cm	○○	14cm		5671-2	
19	C	12.0cm	—	○—	6.0cm	—	○—	4.5cm		5670-4, 撤削途中?	
28		11.0cm	9.0cm	○○	3.0cm以上	2.0cm以上	○—	7.0cm		5567-8	
40	B	16.0cm	8.9cm	○○	3.6cm以上	2.3cm以上	—	8.0cm		5675-3	
41	A	14.6cm	7.2cm	○○	4.2cm以上	3.3cm以上	—	7.7cm		5675-2	
40	A	14.2cm	8.1cm	○○	2.0cm以上	2.3cm以上	—	7.7cm		5675-3	
17	B	10.0cm	8.0cm	○—	4.8cm以上	4.0cm以上	○○	10.5cm		5670-2	
42	E	9.4cm	8.2cm	○○	5.7cm	3.5cm	○○	6.4cm		5675-1	
41	C	9.2cm	6.8cm	△○	2.8cm以上	4.0cm以上	○—	6.0cm		5675-2	
15		14cm	7.0cm	○○	5.0cm	2.7cm	○○	6.0cm		5570-3	
42	D	12.3cm	7.2cm	○○	5.6cm	2.8cm	○○	9.8cm		5675-1	
25		10.0cm	7.5cm	○○	5.5cm	2.6cm	○○	1.8cm		5569-5	
42	B	12.5cm	8.0cm	○○	4.5cm	1.5cm以上	○—	7.0cm		5675-1	
34		12.0cm	8.0cm	○○	—	—	—	10.0cm		5672-1, 橫断面計測不可	
37		11.9cm	7.0cm	○○	3.2cm以上	1.0cm以上	—	9.1cm		5673-3	
39		11.7cm	8.4cm	○○	3.8cm以上	1.8cm以上	—	6.7cm		5673-1	
21	B	11.5cm	8.0cm	○○	1.0cm以上	1.0cm以上	—	11.0cm		5569-2	
6		11.0cm	8.0cm	○○	4.0cm以上	2.0cm以上	—	7.0cm		5571-1	
9		11.0cm	6.0cm	△○	3.0cm以上	1.0cm以上	—	9.5cm		5671-3	
11		11.2cm	5.0cm	△○	3.0cm以上	1.0cm以上	—	9.4cm		5671-5	
31	B	10.0cm	9.5cm	○○	1.5cm以上	—	—	9.5cm		5568-1	
23		10.0cm	9.0cm	○○	5.0cm以上	1.7cm	○○	7.0cm		5569-4	
21	A	9.0cm	8.5cm	○○	4.8cm	1.9cm	○△	6.5cm		5569-2	
18		10.0cm	—	○—	5.0cm	—	○—	8.0cm		5670-3, 撤削途中?	
31	A	10.0cm	8.0cm	○○	4.5cm以上	2.0cm以上	—	6.0cm		5568-1	
27		10.0cm	8.0cm	○○	4.0cm以上	—	○—	8.0cm		5569-7	
30		10.5cm	7.0cm	○○	4.5cm以上	1.2cm以上	○—	8.7cm		5770-1	
24		10.5cm	8.0cm	○○	1.5cm以上	0.5cm以上	—	8.0cm		5569-a	
35		10.0cm	8.0cm	○○	2.0cm以上	0.8cm以上	—	7.0cm		5672-2	
38		9.8cm	7.0cm	○○	3.4cm以上	0.8cm以上	—	6.3cm		5673-2	
16		9.0cm	8.0cm	○○	—	—	—	7.2cm		5670-1, 橫断面計測不可	
14		9.0cm	7.0cm	○○	1.5cm以上	0.8cm以上	—	5.0cm		5570-2	
32	D	10.5cm	5.5cm	△○	3.5cm以上	2.0cm以上	—	7.5cm		5468-1	
32	E	9.0cm	6.0cm	△○	2.0cm以上	—	—	7.0cm		5468-1	
29		10.0cm	6.0cm	○○	—	—	—	10.0cm		5569-a	
33		9.0cm	5.0cm	○○	3.0cm以上	0.8cm以上	—	9.0cm		5467-1	
8	B	8.5cm	6.0cm	△○	3.0cm	1.0cm	△×	7.9cm		5671-2	
17	A	7.5cm	5.0cm	△○	4.3cm以上	1.2cm	○×	10.0cm		5670-2	
26		8.0cm	7.0cm	△○	2.0cm	—	—	6.0cm		5569-6	
22		8.5cm	6.0cm	△△	1.0cm以上	0.5cm以上	—	9.0cm		5569-3	
32	C	8.0cm	6.5cm	△△	0.5cm以上	—	—	9.0cm		5468-1	
5		8.0cm	5.5cm	△△	2.5cm以上	1.0cm以上	—	9.0cm		5470-a	
43		7.5cm	5.3cm	△△	2.0cm以上	1.0cm以上	—	7.5cm		5476-1	
20		7.0cm	5.0cm	△△	2.5cm以上	1.0cm以上	—	6.5cm		5569-1	
3		8.0cm	4.5cm	△×	1.5cm以上	1.0cm以上	—	5.5cm		5371-1	
13		8.5cm	4.5cm	△×	2.0cm以上	1.5cm以上	—	4.5cm		5570-1	
36	B	7.0cm	4.0cm	△×	2.0cm以上	0.7cm以上	—	7.8cm		5673-4	
4		7.0cm	3.0cm	△×	3.0cm以上	0.3cm以上	—	4.0cm		5471-2	
7		5.8cm	4.0cm	×	2.0cm以上	0.5cm以上	—	4.8cm		5671-1	
12		5.5cm	3.5cm	×	2.0cm以上	0.5cm以上	—	5.0cm		5671-a	

※No.1、No.2は削印のみで矢穴は無し。

## &lt;凡例&gt;

類型①(横断面形状)

【横断面上辺】○=11.0cm以上, ○=9.0~10.9cm, △=7.0~8.9cm, ×=7.0cm未満

【横断面下辺】○=9.0cm以上, ○=7.0~8.9cm, △=5.0~6.9cm, ×=5.0cm未満

## 類型②(横断面形状)

【横断面上辺】○=5.0cm以上, ○=4.0~4.9cm, △=4.0cm未満

【横断面下辺】○=3.0cm以上, ○=2.6cm前後, △=2.0cm前後, ×=1.0cm前後

### 山科Ⅲ型

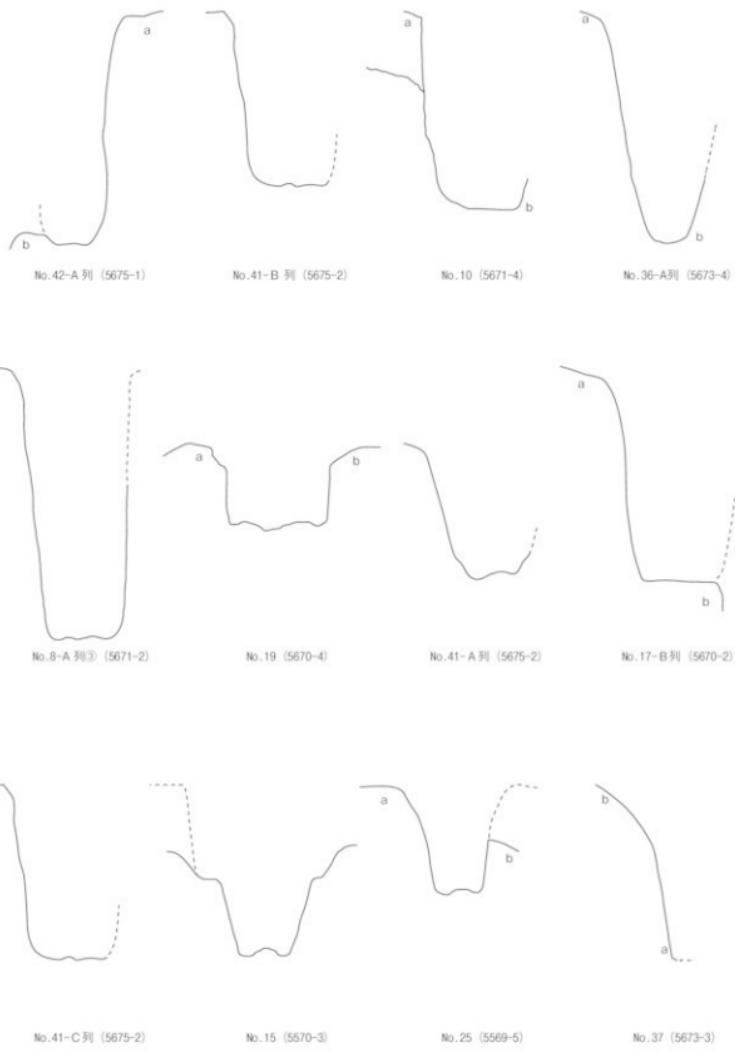
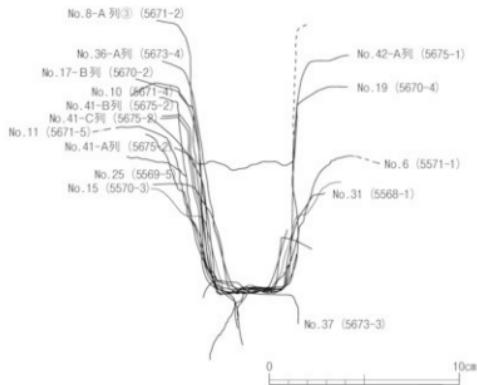
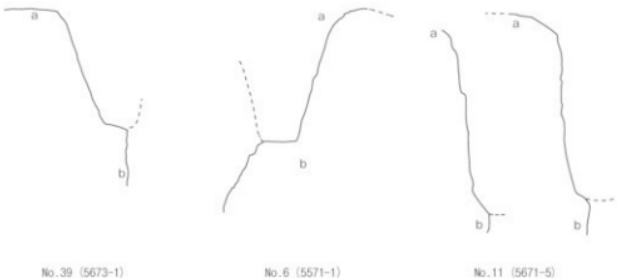


図8 矢穴：山科Ⅲ型断面図（1）

### 山科Ⅲ型



### 参考文献

- 京都橘大学文学部 2016「京都橘大学歴史遺産調査報告書2015」  
高田祐一 2016「採石・加工技術研究における研究方法」  
『第3回中世採石・加工技術研究会発表資料集』中世採石・  
加工技術研究会  
中居和志 2014「伏見城跡」『京都府中世城館調査報告書』  
第3冊 京都府教育委員会

福家恭・高田祐一・広瀬侑紀 2017「伏見桃山城（桃山陵  
墓地）および山科石切場の矢穴からみた採石技術の変遷（試  
案）」『京都橘大学大学院研究論集』第15号 京都橘大学

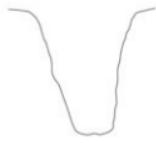
森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」「古代学研究』  
180号 古代学研究会

山科石切場調査・研究グループ 2015「伏見城関連の石切  
場について—「豐徳」期における石垣石材調達をめぐる所見  
の2、3—」

## 山科Ⅱ型



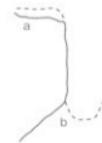
No.23 (5569-4)



No.21 (5569-2)



No.31-A列 (5568-1)



No.24 (5569-a)



No.35 (5672-2)



No.38 (5673-2)



No.14 (5570-2)



No.33 (5467-1)

No.33 (5467-1)  
 No.38 (5673-2)  
 No.21 (5569-2)  
 No.24 (5569-a)

No.35 (5672-2)  
 No.23 (5569-4)  
 No.31-A列 (5568-1)  
 No.14 (5570-2)

0 10cm

図10 矢穴：山科Ⅱ型断面図

## 山科Ⅰ型

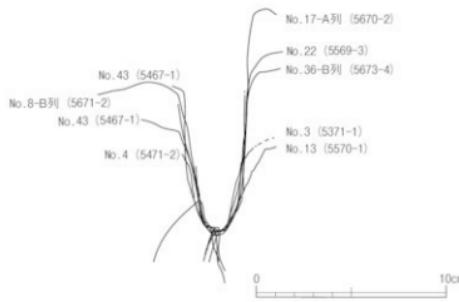
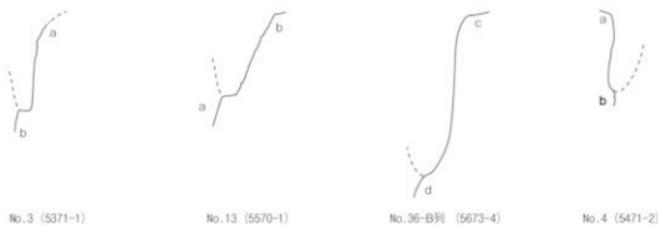
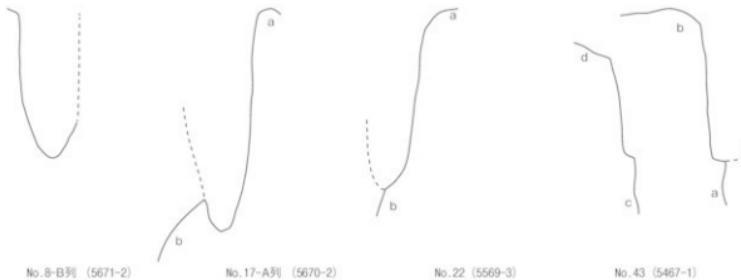


図11 矢穴：山科Ⅰ型断面図

## 山科V型

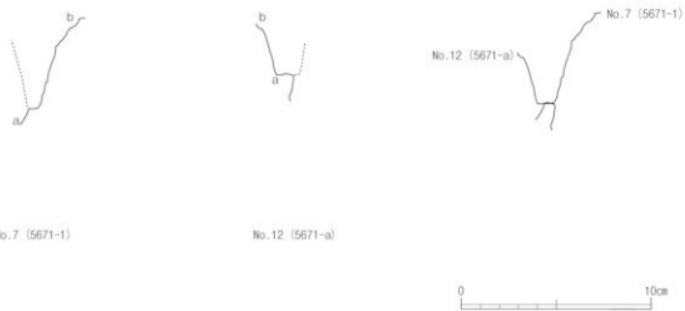


図12 矢穴：山科V型断面図

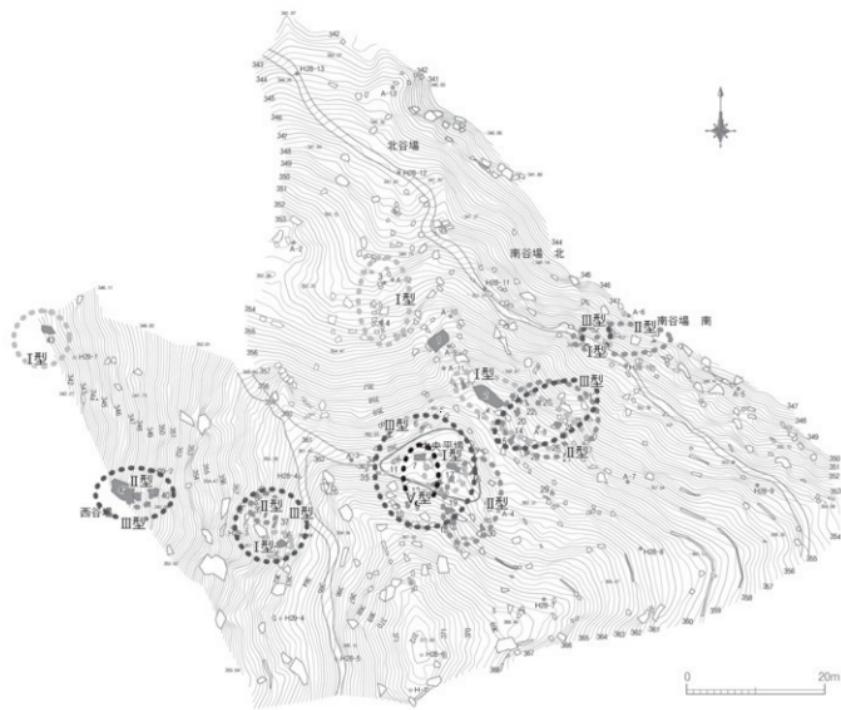


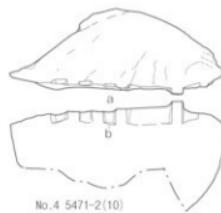
図13 蘭ヶ谷A地区の分類からみた刻印・矢穴石の分布



No. 7 5671-1(14)



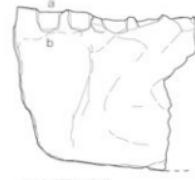
No. 3 5371-1(9)



No. 4 5471-2(10)



No. 5 5470-a(12)



No. 6 5571-1(13)



No. 11 5671-5(18)2



図14 頭ヶ谷A地区 矢穴石（1）

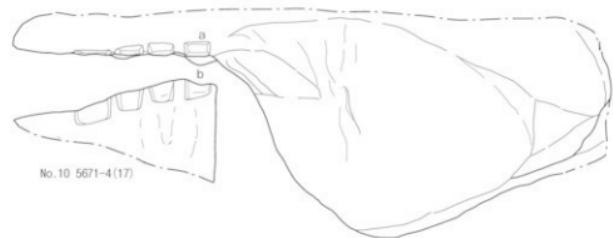
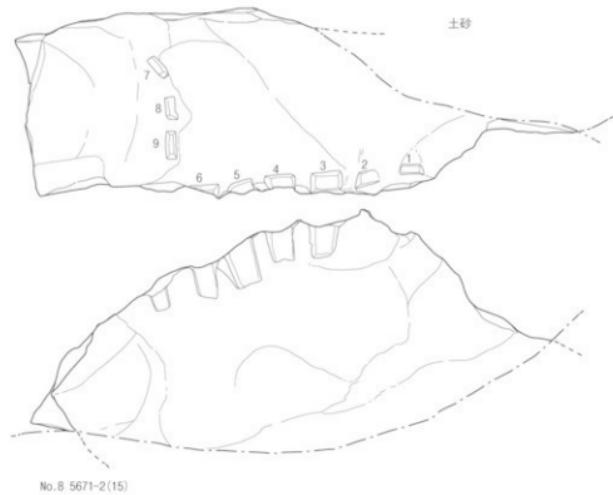
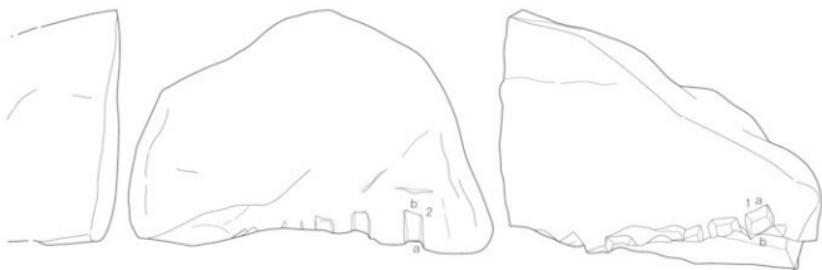


図15 須ヶ谷A地区 矢穴石（2）



No. 17 5670-2(25)

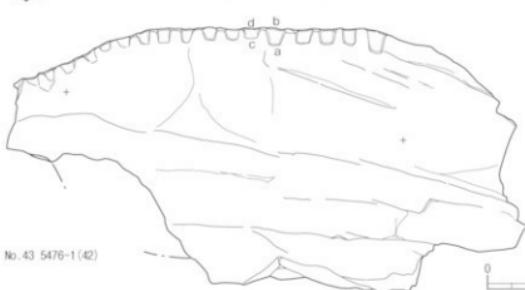
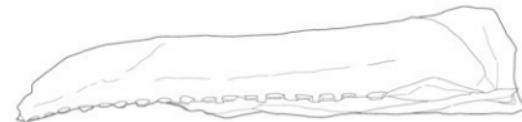
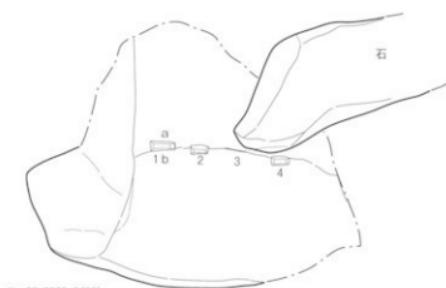
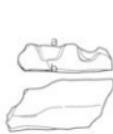
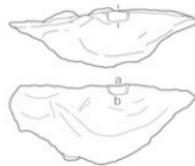


図16 蘭ヶ谷A地区 矢穴石 (3)



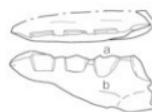
No. 22 5569-3 (30)



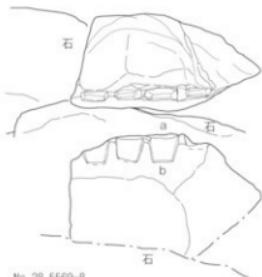
No. 24 5569-a (36)



No. 31 5568-1 (37)



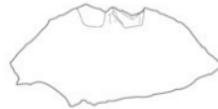
No. 35 5672-2 (8)



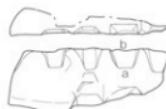
No. 28 5569-8



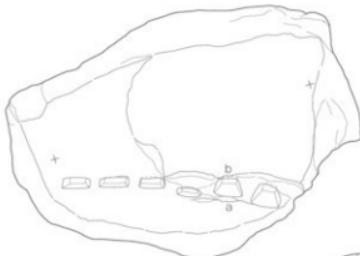
No. 33 5467-1 (44)



No. 34 5672-1 (7)



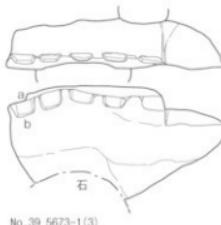
No. 37 5673-3 (5)



No. 36 5773-1 (6)



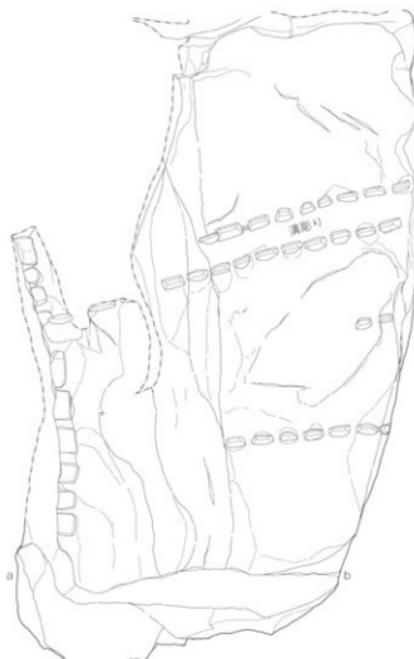
No. 38 5673-2 (4)



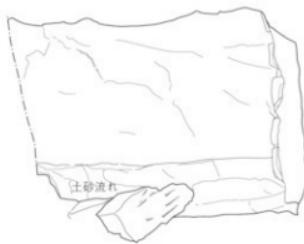
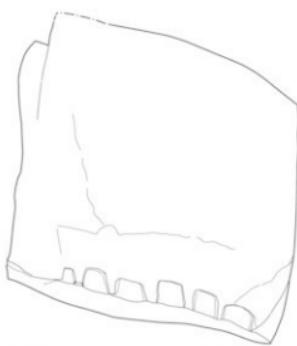
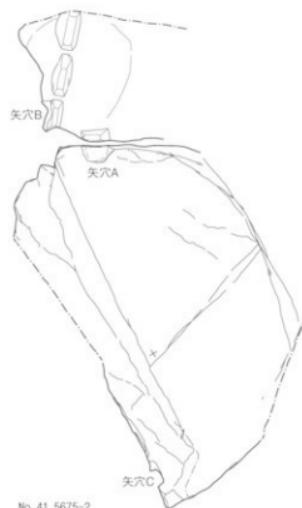
No. 39 5673-1 (3)



図17 須ヶ谷A地区 矢穴石 (4)



0 1 m



0 1 m

図18 蘭ヶ谷A地区 矢穴石（5）



写真10 矢穴石No.33 (5673-1)



写真11 矢穴石No.36 (5673-4)



写真12 矢穴石No.37 (5673-3)



写真13 矢穴石No.38 (5673-2)



写真14 矢穴石No.39 (5673-1)



写真15 矢穴石No.40 (5675-3)



写真16 矢穴石No.41 (5675-2)



写真17 矢穴石No.42 (5675-1) その1



写真18 矢穴石No.42 (5675-1) その2



写真19 矢穴石No.42 (5675-1) その3



写真20 矢穴石No.43 (5476-1)

## 第4章

### 二条城東側堀川石垣の調査 (その1)

#### 1. 調査の経緯と経過

二条城堀川の西側護岸には竹屋町通から、押小路にかけての約230m間に矢穴や諸大名家の刻印が残る石垣がある。これは、平安京造営時に運河として開削された堀川を、1602~1603(慶長7~8)年の二条城普請に伴い、外堀として改修したものとされる。

二条城は京都市中京区二条通堀川に位置し、慶長7~8年に徳川家康の上洛時の宿所として築城された。1619(元和5)年に御座所・大広間・二の間を増築するなど度々改修がなされている。1624~1626(寛永元~3)年、徳川家光によって大規模な改築工事がなされ、西側の拡張や伏見城の天守閣の移築など現在に近い姿に整備された。

本学では、2015(平成27)年から山科大塚・小山石切



図19 二条城東側堀川石垣調査位置

丁場の調査活動を実施した。それと共に、同石切丁場から運ばれた石材が確認できる伏見城跡の石垣や御香宮神社境内の刻印石などを調査してきた(垣内2017)。今回の調査地である二条城堀川については、伏見城を移築した際に多くの石材が2次利用された可能性が想定された。そこで、2016(平成28)年から石垣の実測と、刻印・矢穴の形状の記録を行った。

#### 2. 調査区の設定

調査は、堀川の東側石垣の内、刻印の多く残る夷川通の北側から二条通までの約160mの範囲で実施した。調査にあたっては、夷川橋の北側をN地区、夷川橋から「是れより北紀州」刻印(京都市2010)までをC地区、「是れより北紀州」刻印の南側から二条橋までをS地区として3地区を設定し、それぞれの地区内を遊歩道の舗装単位であった5m前後で区分けを行った。そのため、調査区は北からN 1~8区、C 1~21区、S 1~15区とした。

石垣の実測は小区分け単位で実施し、大地区割りごとに面図を合成した。今回は、N地区的石垣について報告する。

#### 3. 石垣の構造

堀川の石垣は、洛中洛外園などによると二条城が築城された慶長期から存在するようである。しかし、所々には近代以降の土管暗渠が設置された部分や、歩道整備に伴って埋没してしまった部分も見られる。堀川は、江戸時代以降も洪水等により様々な改修工事がなされおり、石材の形状が自然石や規格石材など大小様々であることからも、複数回に亘る改修が想定される。また、奥田尚



図20 二条城東側堀川石垣調査位置詳細  
(京都市理文2010より加筆)

氏の分析によれば、石垣には山科の花崗斑岩や石英斑岩を含む多種多様な石材が確認されている（奥田2017）。

石垣の構造は、基本的に石材を3段に積み上げて構築し、水平方向の目地が通る部分と、小形の切石で積まれた部分、土管暗渠付近の新しく積み直された部分がある。N地区においては、様子の異なる石積みでおよそ3プロ

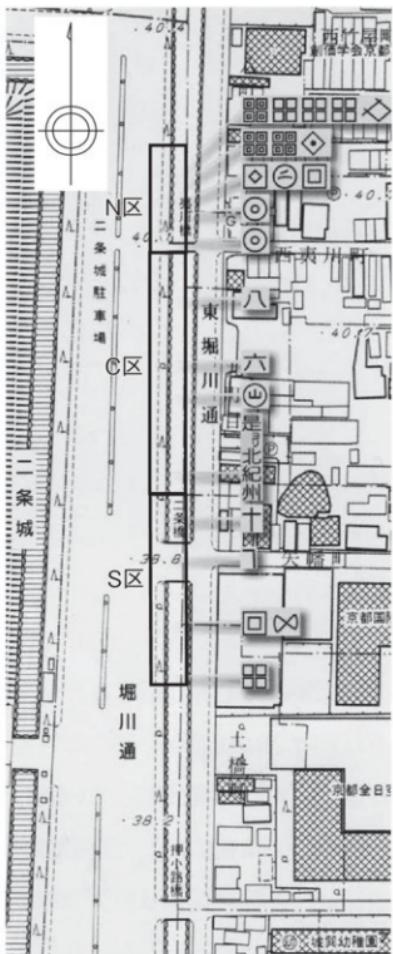


図21 二条城東側堀川石垣調査区域設定図  
(京都市理文2010より加筆)

ックに分かれる。北側のN 1～5区の下段には自然石や二分割された石材を主体とした石材で石垣が構築されている。その上段は、特にN 2～4区に限って、30～50cm程度に加工された切石が地面に対して水平ではなく、下段の石材に合わせて積まれている。一方、南側の夷川橋付近の石垣は最も残りがよく、100cm×70cm前後の石材や130cm×50cm前後の石材を布積みした状況が見られる。また、両石垣の間には2ヶ所の土管暗渠があり、その付近は石積みが乱れている。

現在、N地区には12個の刻印が確認でき、N 2～3区には平四つ目結刻印や四角刻印、N 4～5区には丸刻印、四角に菱形刻印、N 5区と7区には二重丸刻印が含まれ、刻印はそれぞれの石材調達を担当した大名家の印とされ、平四つ目刻印は山科小山・大塚石切丁場に見られるものと類似している。

矢穴は、N 1区に江戸時代中期以降の小形のものも見られるが、多くは豊臣期から近世初期のものである。矢底の横断面形状は、V字形に近い形状やコの字形状のものが混在している。

以上のように、二条城堀川の石垣は、直方体に加工された規格石材が石垣に利用されていることや、元和・寛永段階の矢穴が目立つことから、石垣の大部分は1625～1626（寛永元～3）年の改修に伴ったもの可能性が高い。

#### 4.まとめ

今回の調査により、二条城堀川のN地区では、少なくとも3回以上の改修が確認された。夷川橋付近の石垣は寛永年間の可能性が高い部分も残存していた。また、その石材には古い形状の矢穴も確認することができ、慶長段階の堀川の石垣石材、あるいは伏見城の石垣石材を転用したものと考えられる。

次年度は、C地区やS地区の石垣について整理を進めていき、二条城堀川と山科大塚・小山石切丁場との関係も検討していきたい。

#### 参考文献

- （財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2010 「是ヨリ北紀州」「リーフレット京都」No.153
- 奥田 尚 2016 「二条城堀川沿いの石垣材について（予報）」「京都橘大学歴史遺産調査報告2016」京都橘大学文学部 堀内彩那 2017 「御香宮神社内刻印石について」「京都橘大学歴史遺産調査報告2016」京都橘大学文学部
- 石崎善久 2014 「二条城跡」「京都市中世城館調査報告書」第3冊 京都市教育委員会

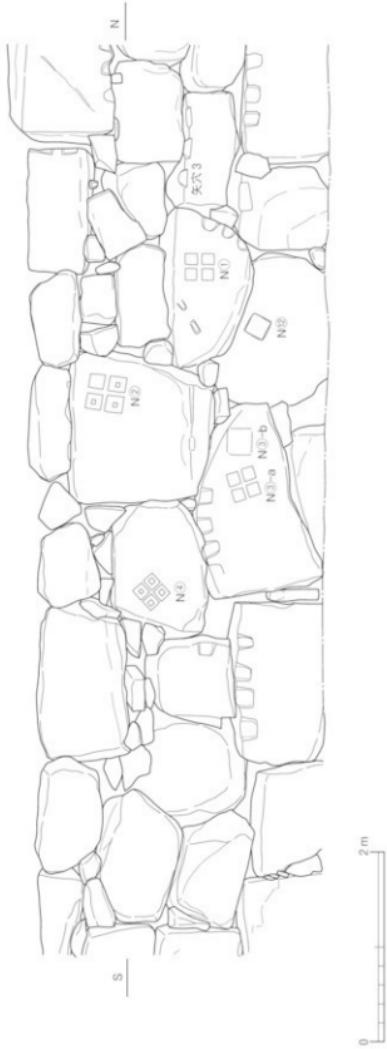
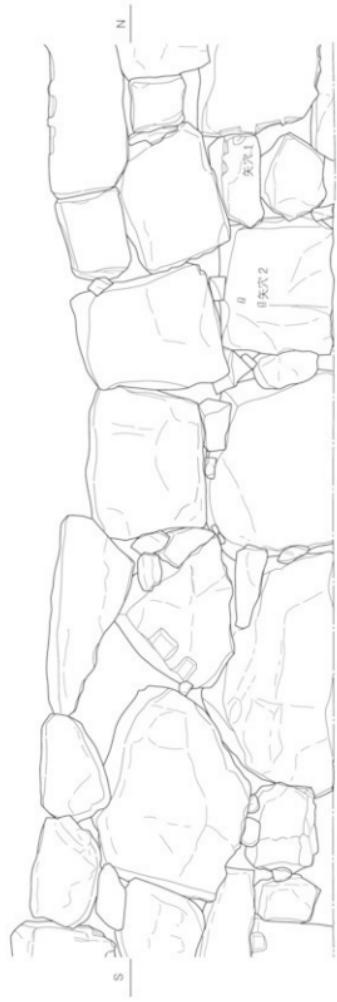


図22 二条城東側堀川石垣N区（1）

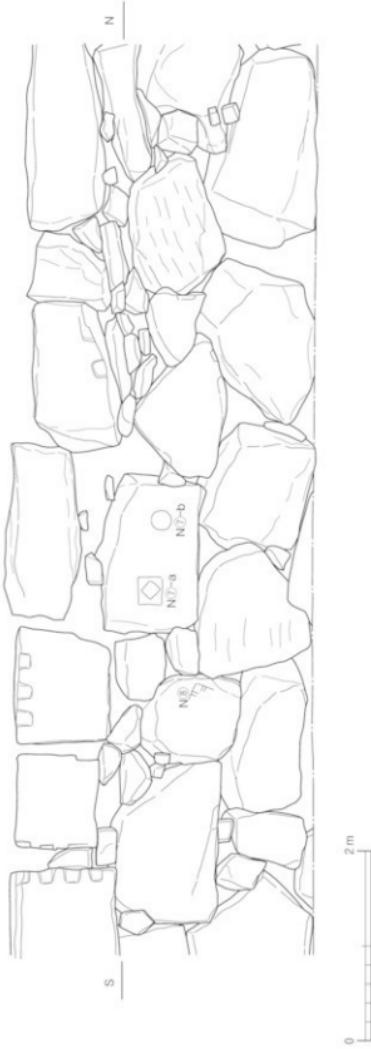
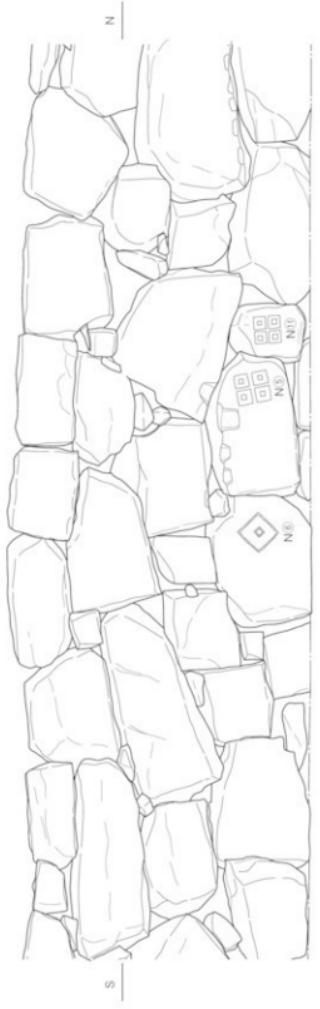


図23 二条城東側堀川石垣N区（2）

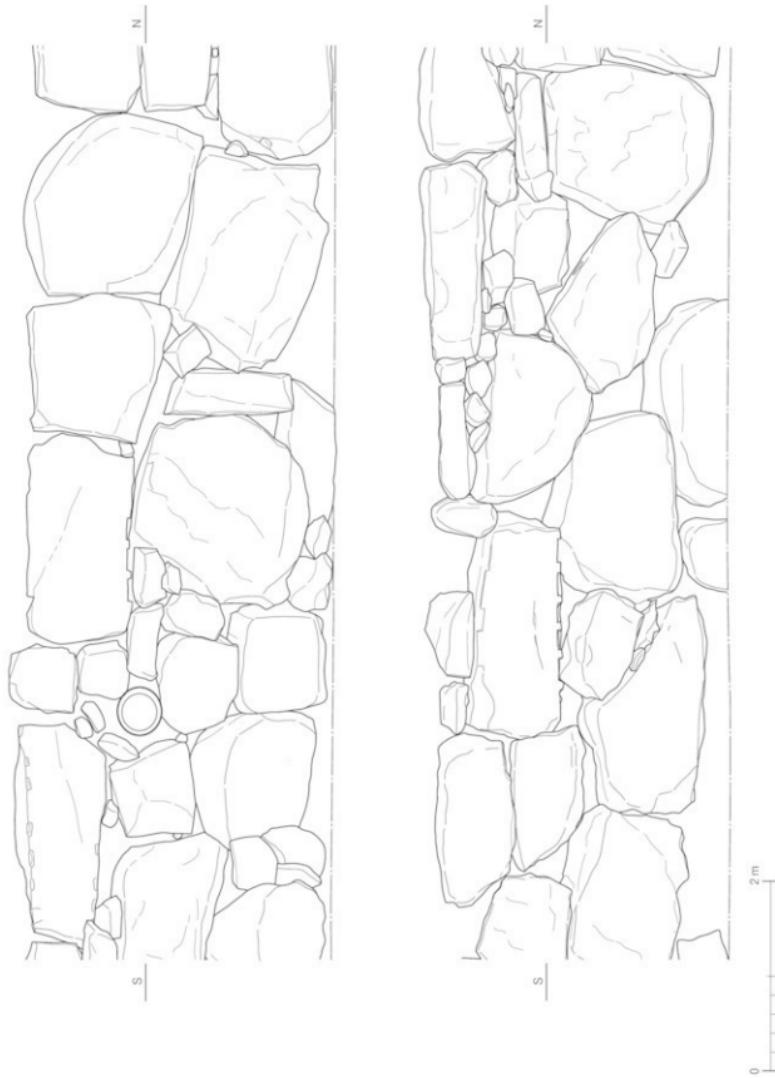


図24 二条城東側堀川石垣N区（3）

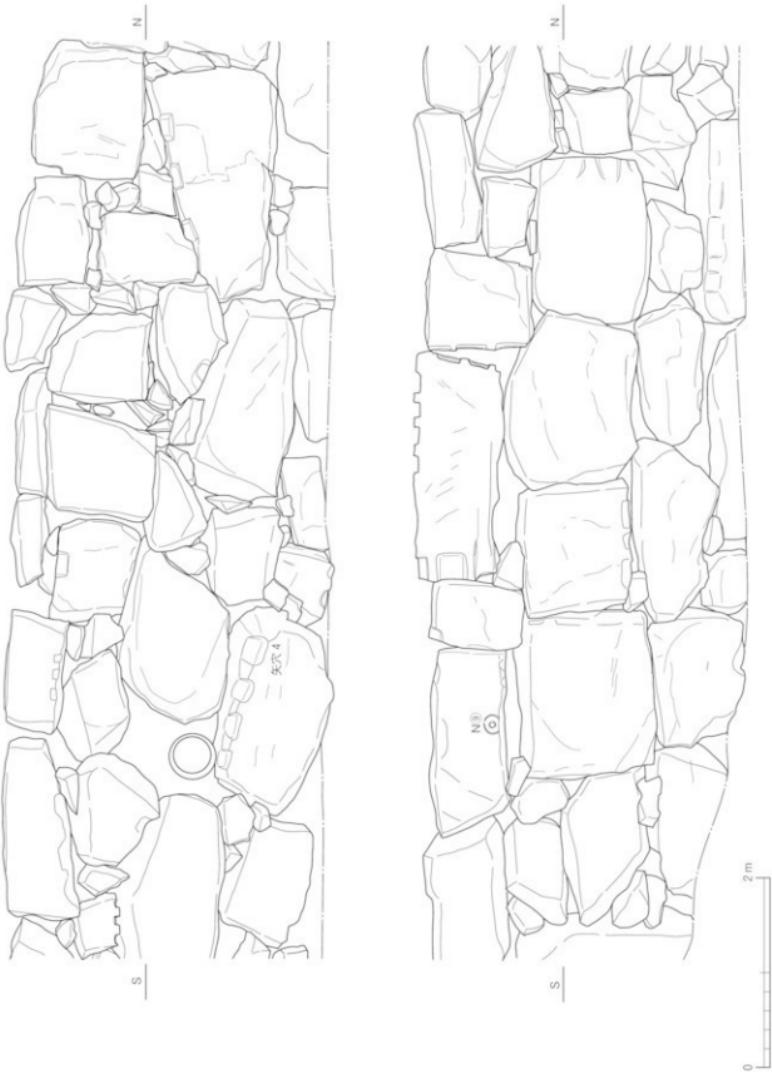


図25 二条城東側堀川石垣N区（4）



図26 二条城東側堀川石垣N区（5）

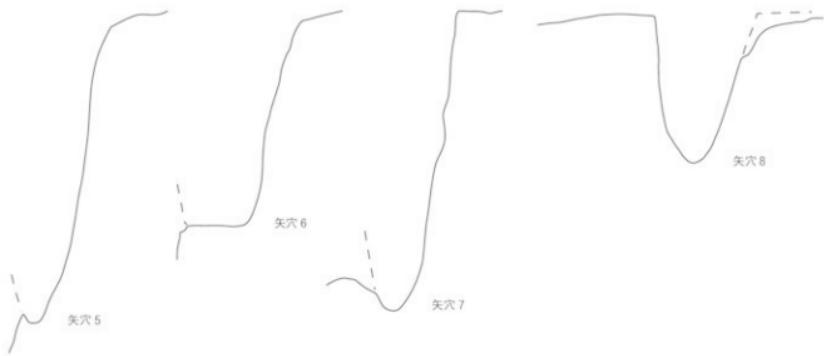
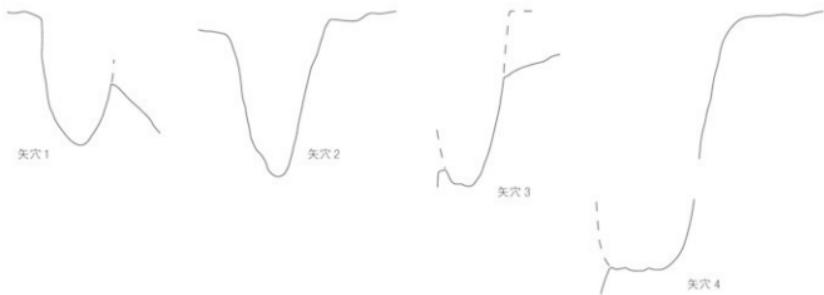


図27 二条城堀川石垣矢穴断面図

表2 二条城東側堀川石垣刻印一覧表

調査区	刻印番号	刻印名	刻印の法量 (縦×横cm)	石材の法量 (縦×横cm)	備 考
N 2	N①	平四つ目結	13×13	40×74	
	N②	平四つ目結	16×16	60×65	
	N③-a	平四つ目結	12×12	40×85	同石併刻
	N③-b	四角	12×12		
	N④	平四つ目結	12×12	40×55	
	N⑤	四角	10×10	40×70	
N 3	N⑤	平四つ目結	16×16	40×70	
	N⑥	二重四角	14×14	50×70	
	N⑦	平四つ目結	14×14	40×30	
	N⑧	刻印?		60×80	摩滅のため判別不可
N 4	N⑨	刻印?		50×60	摩滅のため判別不可
N 4 ~ 5	N⑩-a	四角に菱形	10×10	45×70	同石併刻
	N⑩-b	丸	径9		
N 5	N⑪	平四つ目結	10×10	50×40	半分摩滅
N 6	N⑫	二重丸	径15	50×90	
N 8	N⑬	二重丸	径12	40×105	



写真21 堀川石垣C21-2



写真22 堀川石垣C21-1



写真23 堀川石垣C21-1



写真24 堀川石垣C20-0



写真25 堀川石垣C20-0



写真26 堀川石垣C20-0



写真27 堀川石垣C19-0



写真28 堀川石垣C19-0



写真29 堀川石垣C18-0



写真30 堀川石垣C17-0



写真31 堀川石垣C17-0



写真32 堀川石垣C16-2



写真33 堀川石垣C16-1



写真34 堀川石垣C15-2



写真35 堀川石垣C15-1、C15-2



写真36 堀川石垣C15-1、C14-2



写真37 堀川石垣C14-2、C14-1



写真38 堀川石垣C14-1



写真39 堀川石垣C13-2



写真40 堀川石垣C13-1



写真41 堀川石垣C13-1



写真42 堀川石垣C12-2



写真43 堀川石垣C12-1



写真44 堀川石垣C11-2



写真45 堀川石垣C11-1



写真46 堀川石垣C11-1



写真47 堀川石垣C10-2



写真48 堀川石垣C10-1



写真49 堀川石垣C9-2



写真50 堀川石垣C9-1



写真51 堀川石垣C9-1



写真52 堀川石垣C8-2



写真53 堀川石垣C8-1



写真54 堀川石垣C8-1、C7-2



写真55 堀川石垣C7-1



写真56 堀川石垣C6-2



写真57 堀川石垣C 6-1



写真58 堀川石垣C 5-2



写真59 堀川石垣C 5-1



写真60 堀川石垣C 4-2



写真61 堀川石垣C 4-1



写真62 堀川石垣C 3-2



写真63 堀川石垣C 3-1



写真64 堀川石垣C 2-2



写真65 堀川石垣C 2-1



写真66 堀川石垣C 1-2



写真67 堀川石垣C 1 - 1



写真68 堀川石垣C 1 - 1



写真69 堀川石垣N 8 - 3



写真70 堀川石垣N 8 - 2



写真71 堀川石垣N 8 - 2



写真72 堀川石垣N 8 - 1



写真73 堀川石垣N 8 - 1



写真74 堀川石垣N 7 - 2



写真75 堀川石垣N 7 - 1



写真76 堀川石垣N 6 - 2



写真77 堀川石垣N 6-1



写真78 堀川石垣N 6-1



写真79 堀川石垣N 6-1



写真80 堀川石垣N 5-2



写真81 堀川石垣N 5-1



写真82 堀川石垣N 5-1



写真83 堀川石垣N 5-1



写真84 堀川石垣N 4-0



写真85 堀川石垣N 3-2



写真86 堀川石垣N 3-1



写真87 堀川石垣N 3-1



写真88 堀川石垣N 2-2



写真89 堀川石垣N 2-1



写真90 堀川石垣N 1-2



写真91 堀川石垣N 1-1



写真92 堀川石垣N 1-1



写真93 堀川石垣S 5-1 (矢穴15)

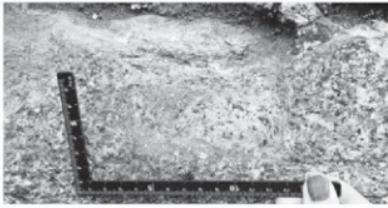


写真94 堀川石垣S 5-1 (矢穴15)



写真95 堀川石垣S 5-1 (矢穴14)



写真96 堀川石垣S 5-1 (矢穴14)



写真97 堀川石垣S 3-1（矢穴13）



写真98 堀川石垣S 3-1（矢穴13）



写真99 堀川石垣C 12-1（矢穴12）

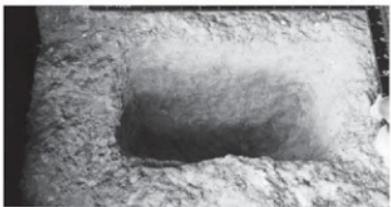


写真100 堀川石垣C 12-1（矢穴12）



写真101 堀川石垣C 12-1（矢穴11）



写真102 堀川石垣C 12-1（矢穴11）



写真103 堀川石垣C 7-2（矢穴10）



写真104 堀川石垣C 7-2（矢穴10）



写真105 堀川石垣C 7-1（矢穴9）



写真106 堀川石垣C 7-1（矢穴9）



写真107 堀川石垣C 6-1（矢穴 8）



写真108 堀川石垣C 6-1（矢穴 8）



写真109 堀川石垣C 5-1（矢穴 7）



写真110 堀川石垣C 5-1（矢穴 7）



写真111 堀川石垣C 5-1（矢穴 6）



写真112 堀川石垣C 5-1（矢穴 6）



写真113 堀川石垣N 8-2（矢穴 5）



写真114 堀川石垣N 8-2（矢穴 5）



写真115 堀川石垣N 7-1（矢穴 4）



写真116 堀川石垣N 7-1（矢穴 4）



写真117 堀川石垣N2-1（矢穴3）



写真119 堀川石垣N1-1（矢穴2）



写真121 堀川石垣N1-1（矢穴1）



写真118 堀川石垣N2-1（矢穴3）



写真120 堀川石垣N1-1（矢穴2）



写真122 堀川石垣N1-1（矢穴1）



## 報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく れきしいさんちょうさほうこく						
書名	京都橘大学 歴史遺産調査報告2017						
副書名	山科大塚・小山石切丁場、二条城東側堀川石垣						
シリーズ名	京都橘大学 歴史遺産調査報告						
シリーズ番号	11						
編著者名	一瀬和夫 広瀬侑紀 峰嶽根絵美 鈴木知怜 畠麻由美 山本美喜						
編集機関	京都橘大学 文学部歴史遺産学科						
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL.075-571-1111						
発行年月日	2018年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
山科大塚・小山石切丁場	京都市山科区大塚・小山	26100 641	34°58'35"	135°50'16"	2017年8月21日～ 24日・26日・ 27日、12月27日		学術調査
旧二条離宮 (二条城)	京都市中京区 二条堀川西入る	26100 A453	35°01'46"	135°75'18"	2017年9月14日・ 15日・17日、 12月15日		学術調査

京都橘大学 歴史遺産調査報告2017  
山科大塚・小山石切丁場、二条城東側堀川石垣

発行 京都橘大学 文学部  
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL.075-571-1111  
発行日 2018年3月31日  
印刷 印真陽社  
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル TEL.075-351-6034



京都橘大学  
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY